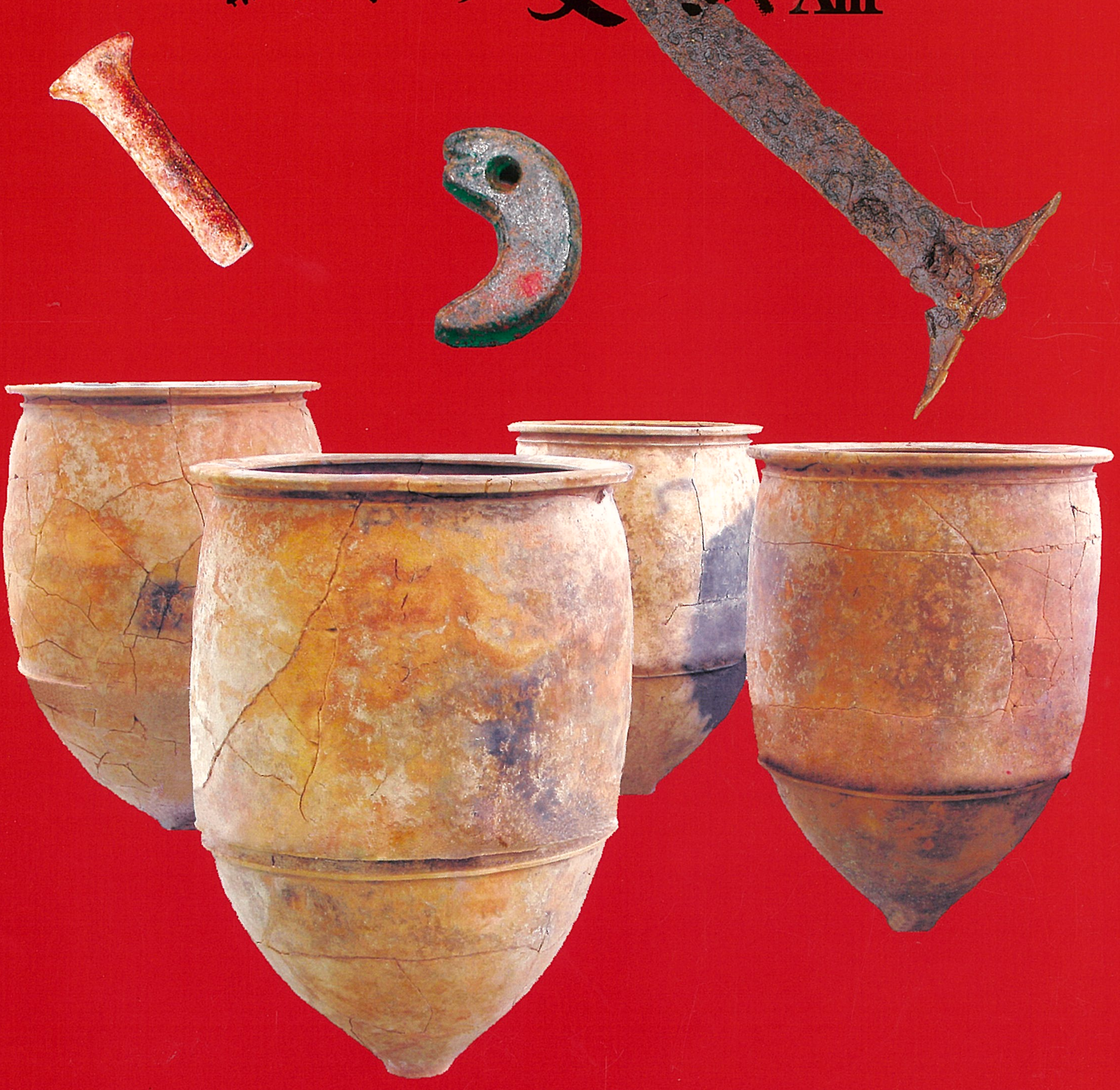
安德台遺跡群

那珂川町の文化財 XIII



2004年
那珂川町教育委員会

はじめに

那珂川町は、はるか遠き時代から栄えたところです。これは、町内各地に眠る豊富な遺跡だけでなく、現人神社の造営や裂田溝の掘削をはじめ、那珂川町がさまざまな歴史の舞台に登場することからもうかがえます。安徳台もそのひとつで、平家物語では安徳天皇が仮の御所をかまえた故地として登場します。また、台地上には多くの土器や石器などの遺物が落ちていることから、以前から、重要な遺跡があるといわれてきました。

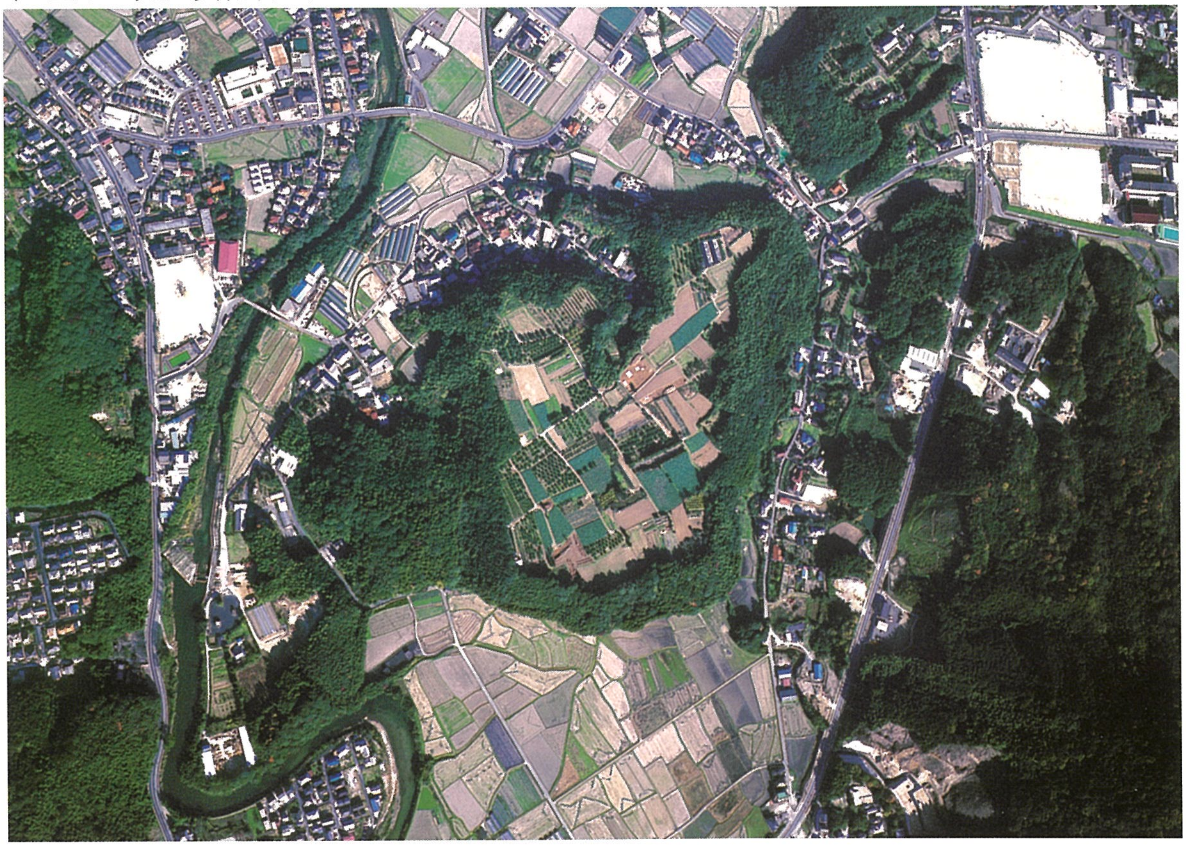
教育委員会では、この台地に眠る遺跡の実態を調べるため、地元や地権者の方々の協力を得て、平成９年度から平成15年度まで発掘調査を実施しました。その結果、弥生時代や奈良時代、室町時代の遺跡が見つかり、特に弥生時代の遺跡では、毎年、新聞紙面をにぎわすような重要な発見が相次ぎました。今後、この安徳台に眠る重要な文化遺産と豊富な自然をどう未来へ引継ぎ役立てればよいか、多くの方々の智恵を借り、文化財保存整備基本計画で練りいれたエコミュージアムから検討を行っていきたいと考えています。

最後になりますが、発掘調査にあたりご指導やご教授をいただいた各大学の先生方や福岡県教育委員会をはじめ、調査の承諾など協力をいただきました地権者や地元の方々に、心より御礼申し上げます。

平成16年３月31日

那珂川町教育委員会
教育長　**篠田　直喜**

（上空から見た安徳台▼）

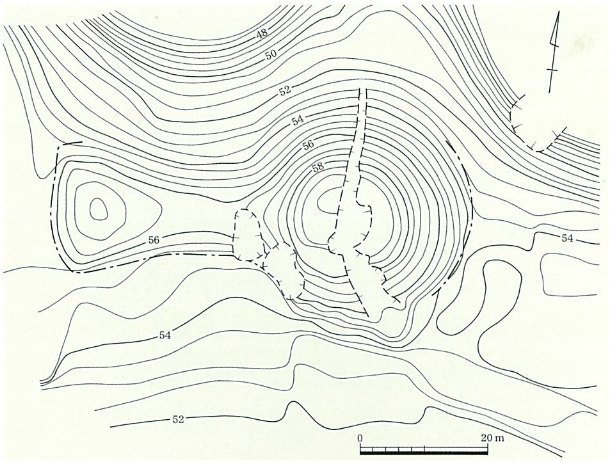


周辺の遺跡

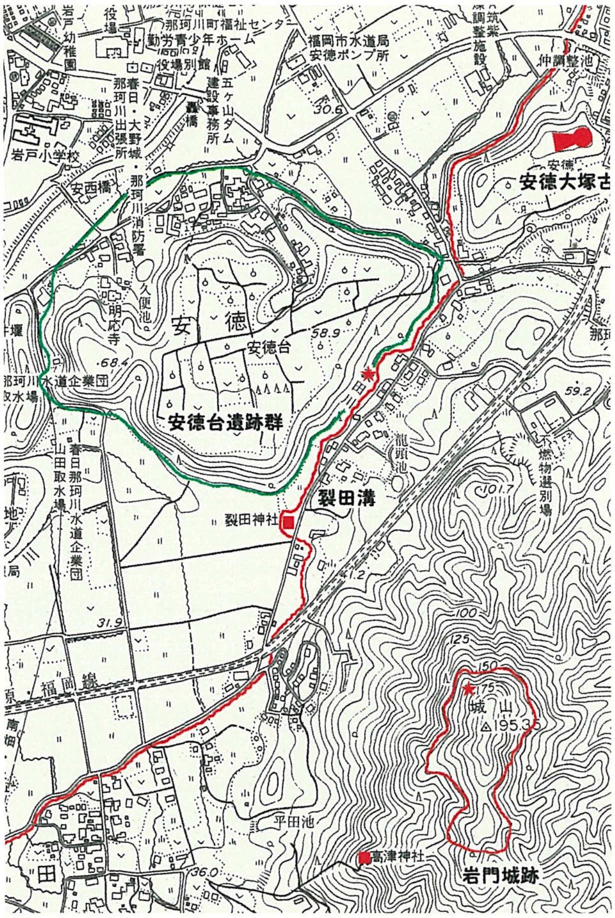
安徳大塚古墳（あんとくおおつかこふん）

福岡平野で、最も古いといわれる前方後円墳です。全長64ｍ、周溝まで含めると81ｍの大きさです。発掘調査は行われておらず、詳しいことはよく分かっていませんが、墳丘からは埴輪が出土しています。

（安徳大塚古墳地形図▶）



（▼周辺の遺跡　★は写真の場所）



裂田溝（さくたのうなで）

山田の一ノ井手を取水口にし、今光までの田をうるおす全長約5.6 kmの人工の水路です。日本書紀に「大岩が立ちふさがり溝の完成を妨げたので、天に祈ったところ雷が岩を裂いて完成した」とあります。このことが名前の由来となりました。また、安徳台はこの雷鳴の轟いた場所として「迹驚岡（とどろきのおか）」と記されています。

（裂田神社横から見た裂田溝▼）

岩門城跡（いわとじょうあと）

平安時代に、北部九州を治めていた原田氏によって造られたといわれています。鎌倉時代におきた元寇（げんこう）の襲来（しゅうらい）のときには、九州武士団の総大将「少弐景資（しょうにかげすけ）」の城で、幕府も重点的に整備を行いました。その後、室町時代まで、この一帯を治める拠点として重要な役割を果たしました。

（山田側から見た岩門城▶）

安徳台遺跡群の概要

安徳台は、福岡平野の最奥部に位置し、阿蘇山の火砕流によって形成された台地です。台地上の広さは100,000㎡で、裾野まで含めると225,000㎡になります。また、平地との比高差は30ｍほどで周囲は切り立ち、いわば自然の要害ともいえる地形をしています。

発掘調査は、平成９年度から15年度までの７年間行いました。調査の結果、弥生時代、奈良時代、室町時代の遺跡が発見されました。

弥生時代の遺跡は、中期から後期初め（約2200～2000年前）の集落と中期後半（約2100年前）の墓地が見つかっています。集落は台地全体に広がり、これまで、130軒をこえる住居が確認されました。住居のなかには、煮炊きに使用したカメ、物を蓄えたツボ、食物を盛った高坏、稲の穂を摘むための石包丁、石製の剣、鉄製の斧、そのほかに青銅器を作る鋳型や勾玉、小玉など多くの遺物が残されていました。墓地はカメ棺墓で、10基を確認しています。一部の発掘調査しか実施していないため詳しくは分かりませんが、平野を見下ろすことができる台地の先端近くに造られています。

奈良時代（約1300年前）の遺跡は、掘立柱建物が見つかっています。建物は平野に面する台地の北側に立てられ、一部に平野から建物に通じると考えられる道状の遺構も見つかっています。

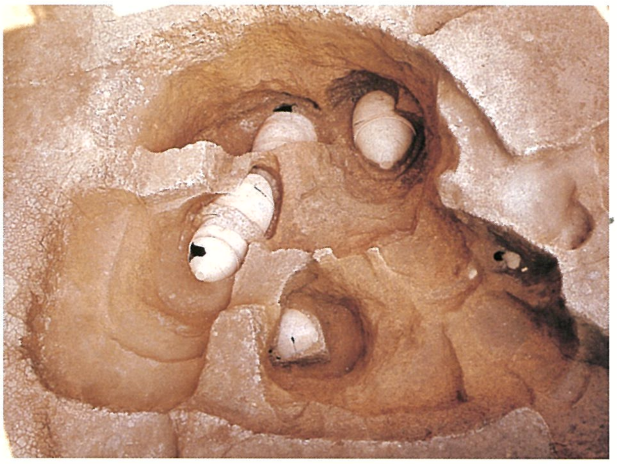
室町時代（約600年前）の遺跡は、居館と墓地が見つかっています。居館は、台地の南西部に造られ、建物を３棟確認しています。周囲は溝で囲まれ、外側では墓地や地下式横穴も見つかっています。

（▼安徳台地形図）

王墓の発見

平成15年1月、地表面から2m下で、弥生時代の墓地が初めて見つかりました。お墓はカメ棺墓といわれるもので、大きなカメが2基並んで横たわっていました。このうちの1基には、当時、権力の象徴のひとつであった鉄製の戈が棺の上に置かれた状態で見つかったことから、もしかすると、「この一帯を治めていた人のお墓かもしれない」という大きな期待がふくらみました。そこで調査範囲を広げ、平成15年度まで調査を行うことにしました。

調査範囲を広げた結果、これまで那珂川町で調査を行ったカメ棺墓とは、比較できないほどの巨大な墓こう（4×5m）があらわれました。墓こうのなかには合計6基のカメ棺が埋葬され、最初に見つけたカメ棺墓は、一番深いところにありました。また、普通カメ棺墓地には、おとなと同じくらいの数のこどもの棺が埋葬されているのに、ここからは一つも見つからなかったことで、特別な人たちのお墓であるという確信が深まりました。



（◀墓こうの様子）

たくさんのカメ棺が見えます。奥に並んでいるのが2号・5号カメ棺です。

（▼墓こうの発掘風景）

人の大きさとくらべると墓こうの大きさがよくわかると思います。

2・5号カメ棺墓

巨大な墓こうで最初に発見したカメ棺墓が、２・５号カメ棺墓でした。最初は、幅70㎝ほどのトレンチのなかでの発見であったため棺の一部しか分かりませんでしたが、両方のカメ棺とも、これまで町内で調査されたカメ棺とは比べものにならないほど大きなもので、とてもていねいに作られていました。

調査を進めると、両方のカメ棺とも合わせ口という２個のカメの口と口を合わせて埋葬するもので、墓こうを西側から階段状に掘り込んで、床には白色の粘土をしきつめていました。また、東側の壁の一部をくりぬいて、そこには下カメを差し込んでいました。上下のカメの口と口を合わせた部分には黒色の粘土が分厚く巻かれ、棺は完全に密封された状態でした。

２号棺の外では鉄戈のほかに、鉄剣も見つかりました。棺を開けると、なかには男性が埋葬されていました。男性は、右手とその付近にゴホウラ貝で作られた腕輪を43個、頭のまわりにはガラス製の塞杆状製品２個、勾玉３個、それと300を超える管玉が一緒に入れられていました。また、棺内は上カメに黒色の塗料を塗り、下カメの頭近くには朱がありました。

５号棺には、女性が埋葬されていました。頭の横にガラス製の塞杆状製品２個が入れられ、棺内は朱で真っ赤に塗られていました。

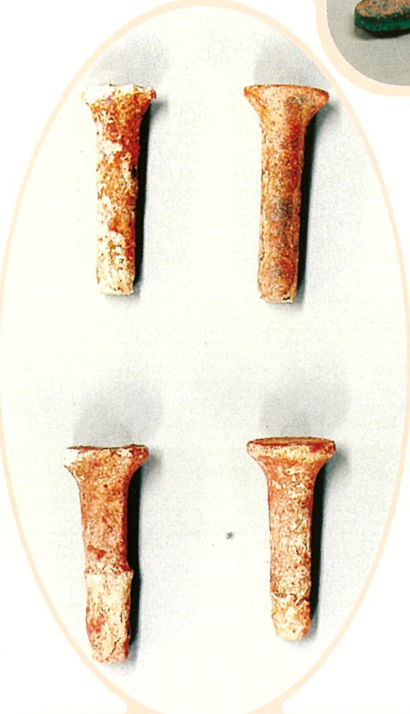
(▼カメ棺出土状態)

〈５号棺〉　〈２号棺〉

副葬品

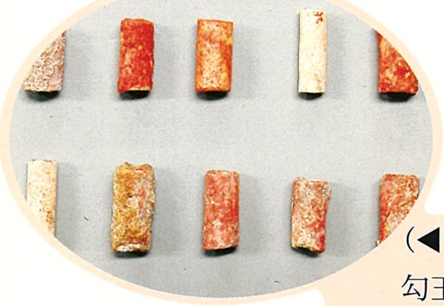
（▲鉄戈）お墓からよく出土しているため生前の権威や地位をあらわすものと考えられています。（長さ約 30 cm）

（ガラス製勾玉▶）
左端のものは当時の状態が良く残っています。
（長さ約１．６ cm）

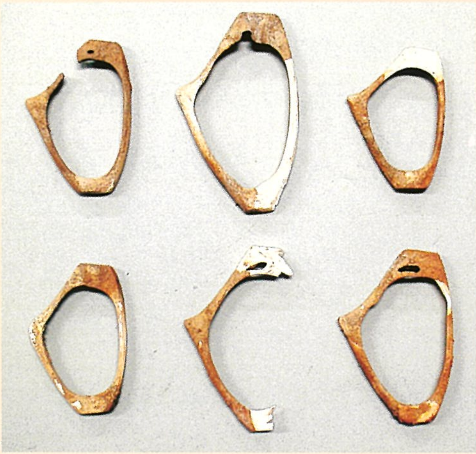


（▲塞杆状ガラス製品）
全国で２例目の出土。中国での使用法と違い髪飾りとして使われていたようです。（長さ約４cm）

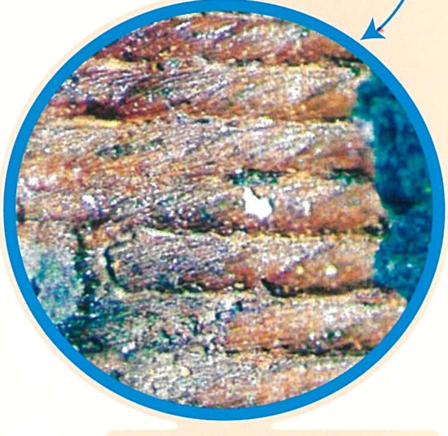
（▶鉄剣）
鉄戈と同様に権威や地位をあらわすものです。（長さ約30 cm）



（◀ガラス製管玉）
勾玉と組み合わせ装飾品にしていました。（長さ約１．２cm）

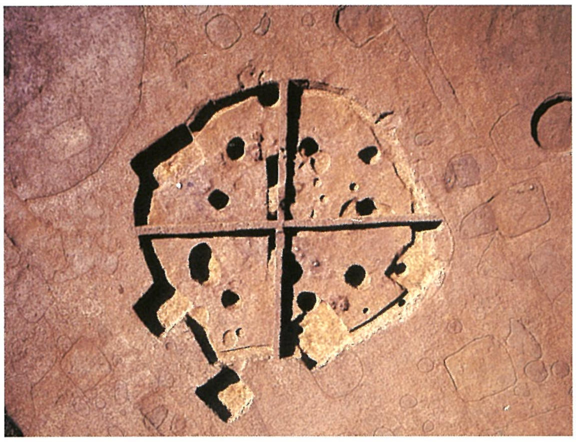


（◀ゴホウラ貝製腕輪）
奄美大島より南の海で採れる巻き貝で１つの貝から１個しか作れない。43 個も出土したのは日本で初めてです。
（長さ約 13 ～ 15 cm）



（▲鉄剣柄部分の巻き糸）

住居跡 〈弥生時代中期から後期初めのものが130軒ほど見つかっています〉



（◀16号住居跡（中期前葉））

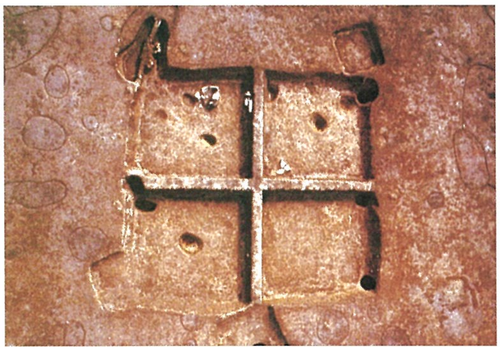
大きさは一辺7mほどで、形は隅丸方形です。柱は8本で、深い柱と浅い柱が一本おきに並んでいます。中央には炉が作られていますが、これは安徳台の住居の炉ではもっとも大きなものです。床面には火事をおこしたのか、炭と焼け土が一面に広がっていました。この時期の住居は、円形や方形のものも見つかっています。

大きさは直径14.6mあります。柱が18本もあり、なかからは土器をはじめ、勾玉、青銅器の鋳型、鉄斧、石包丁、石剣やこれらの品物を作るのに使用した石の台や砥石などの遺物が出土しました。床面には炉のほかに、鉄器の加工を行ったのか、炭を含み硬く焼けしまったところが数箇所見つかりました。また、この住居の周囲では、一辺が3mほどの小型の方形住居が、5軒まとまって見つかっています。

（▲2号住居跡（中期中葉））

（◀18号住居跡（中期後葉））

大きさは直径10m前後で、形は楕円形です。柱は12本で、なかは二段に掘りこまれています。住居からは、土器のほかに管玉、鉄片、石包丁、青銅製のやじり、糸をつむぐ道具である紡錘車、砥石が出土しました。管玉は天河石（アマゾナイト）という石で作られていますが、我が国周辺では韓国でしか採れず、遺跡からの出土も数例あるのみです。青銅製のやじりは漢式鏃と呼ばれ、当時の中国からもたらされたものです。この時期の住居は、すべて円形または楕円形をしています。



（◀22号住居跡（後期初頭））

大きさは4m前後で、形は方形です。この時期の住居はまだ4軒しか発見されていませんが、前の時代と比べて規模が小さく、形が円形から方形に変化しているのが特徴です。住居からは、土器のほかに鉄器も見つかっています。

出土品

（▲漢式鏃）銅製で断面はほぼ正三角形で、当時の中国から海を越えてきた貴重品です。
（残存長約２．３cm）

（鉄斧▶）
木を切るための道具で、石製のものより切れ味、耐久性が格段に向上しました。
（長さ約11．３cm）

（天河石製管玉▶）
この周辺では韓国でのみ産出し、漢式鏃と同様に海を越えてきた貴重品です。
（長さ約８mm）

（◀勾玉）
軟質の石材で作られています。１度壊れたものに穴をあけ直して使用しています。
（長さ約２．３cm）

（▲青銅器の鋳型）
滑石片岩を削って作られています。製品の種類ははっきりしませんが剣や鉾などの先端近くと考えられます。
（たて約４．７cm、よこ約２．７cm）

（石剣▶）
左は玄武岩、右は輝緑凝灰岩を丁寧に磨いて作られています。
（長さ　左約11cm、右約７．４cm）

奈良時代の建物

これまでの調査で、当時の入り口と考えられるウソの谷の周辺から、４棟の建物を確認しています。ここは福岡平野を一望できる場所で、晴れた日には志賀島や能古島など博多湾まで遠望することができます。柱の掘り方は一辺１ｍをこえ、柱は痕跡から考えると直径30㎝ほどと、当時としてはかなり大きな建物であったと考えられます。詳しい時期は判断できませんが、出土した瓦から７世紀代にはすでに立てられていたようです。

（▲１号掘立柱建物）

２×４間の総柱の建物で、倉庫と考えられます。柱の掘り方は方形で、この柱穴と近くから見つかった当時の道と考えられる遺構からは、瓦が出土しています。

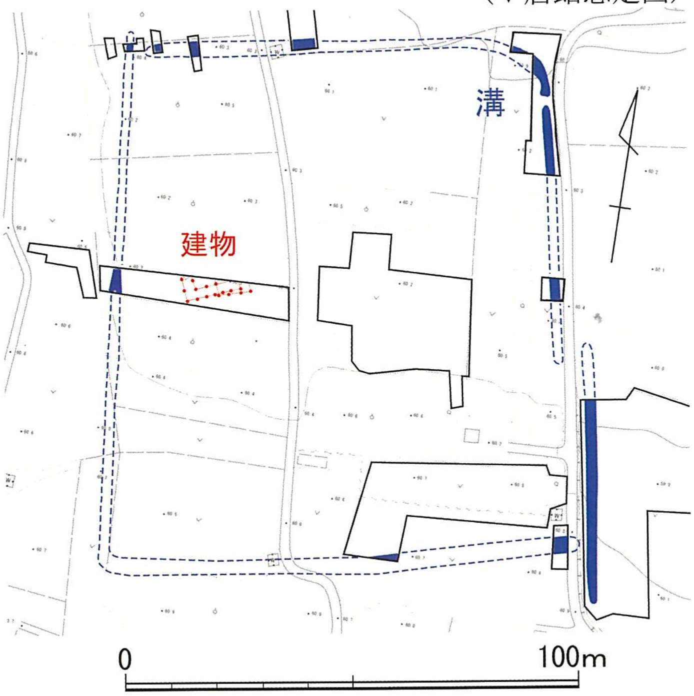
（◀６号掘立柱建物）

１×９間の建物です。１間の建物は大変珍しく、家屋ではなく厩（うまや）ではないかと考えられます。

室町時代の居館

台地の南西部から、居館が見つかっています。居館は一辺が110ｍほどの方形で、西側を除く三方向を溝で囲まれ、残りは溝または柵をめぐらしています。溝には、入り口と見られる陸橋状に切れたところが数箇所あり、一部には門の跡とも考えられる柱を建てた穴の跡も見つかっています。居館内の調査は一部しか行っていませんが、現在まで３棟の掘立柱建物も見つかっています。居館の外からは、木棺墓や当時の武士の墓ともいわれる地下式横穴が見つかっていますが、これらは台地の東側に多く見られます。形は、長楕円形と方形のものがあります。

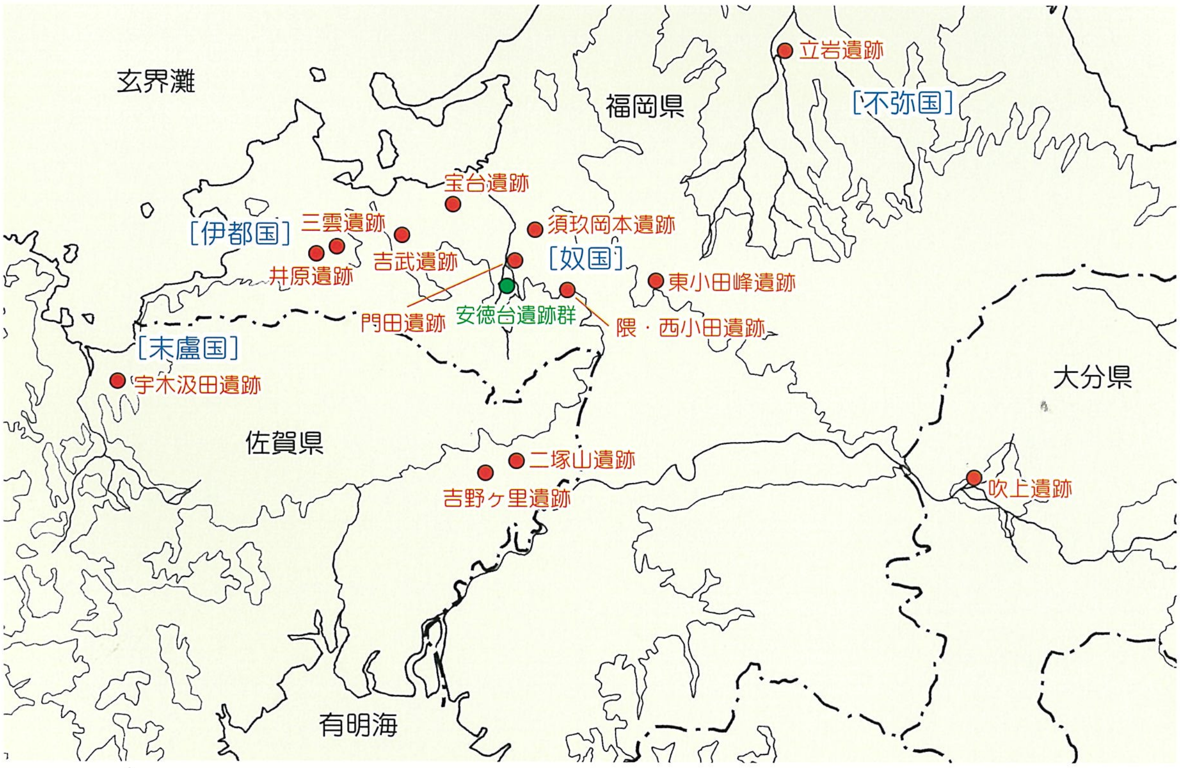
（▼居館想定図）



おわりに

これまで紹介してきたように、安徳台には重要な遺跡が多く眠っています。なかでも弥生時代を見ると、住居は合計130軒をこえました。町内では、この時代の住居は13軒しか見つかっておらず、「奴国」の範囲と考えられている地域でも100軒をこえる住居が見つかっているのは、春日市の須玖・岡本遺跡群や福岡市の比恵遺跡群（ともに国指定史跡）ぐらいです。住居は、各時期を通じ大型が多いのも特徴で、10ｍ前後の住居も6軒見つかっています。特に2号住居は中期中葉では日本最大級で、鋳型は遺構に伴ったものとしては日本最古の例です。これら大型の住居からは、天河石や漢式鏃など、ほかの住居では出土していない貴重な遺物が出土していることから、村の長の住居と考えられます。次にカメ棺墓は、町内でこれまで約300基を調査していますが、副葬品は観音堂遺跡群から、ゴホウラ貝製の腕輪が1個とヒスイ製の管玉が12個、宗石遺跡群から、銅釧が4個出土しているだけです。安徳台ではカメ棺墓10基を確認し、8基の調査を行いましたが、前にも書いたように、2号カメ棺墓には鉄戈・鉄剣、貝釧、塞杆状製品・勾玉・管玉、5号カメ棺墓には塞杆状製品が副葬されていました。このなかの塞杆状ガラス製品は、日本では飯塚市の立岩堀田遺跡につぎ2例目の出土です。これらの豊富な副葬品は、ここに埋葬された人たちが、王や首長などの特別な地位の人物であることを裏付ける資料であり、住居も含め、安徳台が奴国の拠点的集落であることを決定付ける証拠となりました。また、この発見で、集落と墓地の関係など、当時の村の様子を復元できる学術上重要な遺跡であることが分かりました。このほか、飛鳥・奈良時代や室町時代などでも重要な遺跡が見つかっており、この安徳台が永いあいだ、歴史上で重要な位置を占めていたことが分かってきました。

（▼安徳台と同じ時期の主な遺跡）



安徳台遺跡群

那珂川町の文化財XIII

２００４年

初刷　2004年3月31日
第2刷　2008年3月31日

発行：那珂川町教育委員会
福岡県筑紫郡那珂川町西隈1丁目1番1号

印刷：有限会社 成光社
福岡市南区大楠1丁目29番33号